

ラオス研修を終えて

琉球大学医学部医学科4年次

074142G

座間味優

今回のラオス医療援助活動では、11日間の中でとても多くのことを学ぶことができました。現地での医療援助活動、ラオスの学生との交流、ラオスの小学校見学、寺院の見学、ウドムサイからルアンプラバンへのバスでの長旅、先生方との意見交換、ラオスの料理や文化など、この旅で起こった一つ一つが私にとってよい経験となりました。

その中でも私は大きく2つのことについて学ぶことができました。

まず1つ目は実際の医療現場を経験できたことです。

私を含め4年次はまだ医療現場そのものに入ったことがほとんどないため、術前診察から、手術、術後ケアの一部始終をみるのができたのは大きな経験になりました。

術前診察では、何らかの理由により今回手術を受けられないことになってしまった子供のお母さん達の淋しそうな表情が今でも忘れられません。また、できないと伝える時の先生方の言葉を慎重に選びながら話す様子にプロはすごいなと感心させられました。

手術現場では初めて、口唇口蓋裂の手術を見学させていただきました。麻酔のかけかたなども含めて、今まで教科書だけで学んでいたことを実際に見ることができうれしかったです。手術中先生方に余裕があれば、手術中の疑問点などを質問したりして、非常に有意義な時間となりました。これからの勉学にますます気合が入りそうです。

術後の様子も見学させていただきました。手術が終わった直後の患者と家族の対面の様子を見て、子供の手術を待つ親の気持ちが少し理解できた気がしました。また、しきりに“コップ・チャイ（ありがとう）”と言っているのを聞いて、このボランティアに参加してよかったと心から感じることができました。

この旅で私が学んだことの2つ目として言葉とコミュニケーションについてということが挙げられます。

単に英語やラオス語を学んだということだけでなく、お互いの言語能力に応じた話し方やコミュニケーションの取り方を変えていく必要があるのだなと感じました。ラオスの学生でも非常に英語が得意な人もいれば、苦手な人もいました。英語が得意な学生との会話は正直私がついていくのが精一杯でしたが、英語が苦手な学生と話す時は相手がわかる単語を使うかを考えたり、デジカメの写真を使いながら説明するなどの工夫を心がけました。

このようなケースは医療の現場にも当てはまると思います。医師同士の会話、コメディカルスタッフとの会話、患者や家族との会話、それぞれのケースで使うべきことばのレベルをうまく変えていく必要があると思います。特に、医学に対して無知な患者に医療用語をひたすら連ねるのでは、良好な関係を築くのは難しいとおもいます。小学生でも理解で

